聖書研究祈祷会　　2026 年 4 月 16 日

聖書：ヨハネの黙示録 2　1 章 4－8 節

前回学んだことであるが、ここでもう一度、『ヨハネの黙示録』がどんな本であるかを確認する。『ヨハネの黙示録』は、恐ろしい預言や難しいシンボルがたくさん出てくるため、読みづらいと感がある。しかし、宗教改革者たち（ルターやカルヴァンなど）の伝統に立つプロテスタント教会では、この書物を「未来の恐ろしい出来事を予言する」ようなものではなく、「どんな苦難の時代にあっても、神様が必ず勝利されることを教える希望の手紙」として理解する。

当時、初代教会のキリスト者たちはローマ帝国から激しい迫害を受けていた。黙示録は、そうした苦しい現実の中で「この世界の本当の支配者は誰なのか」を思い起こさせ、信仰を励ますために書かれたのである。

今日のところの 1 章 4 節から 8 節は、著者がアジアの七つの教会に充てた手紙の「挨拶」部分にあたる。しかしここには、キリスト教の最も大切な教えがぎっしりと詰まっているのでそれを確認していく。

4－5節前半。三位一体の神様からの挨拶

「アジア州にある七つの教会へ」。**「七」**という数字は、聖書の中で「完全」を表す。だから、これは当時の特定の教会だけでなく、いつの時代、どこの場所にいる教会（私たち）にも宛てられた普遍的なメッセージだと理解できる。

「恵みと平安」。著者ヨハネはこれが、三位一体の神（父なる神、聖霊、イエス・キリスト）から来ると宣言し、三位一体の神を次のように紹介している。

＊父なる神：**「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」**と呼ばれる。これは、神が時間を超えた永遠の存在であり、過去から未来に至るまで、歴史のすべてを完全にコントロールしておられることを意味する。

＊聖霊なる神：**「玉座の前のおられる七つの霊」**と表現されている。これは 7 つの天使のことではなく、「完全に満ちあふれて働く聖霊」の姿を表している。聖霊は、父なる神の恵みと力を教会の隅々にまで行き渡らせてくださる。

＊イエス・キリスト：主イエスについては、3つの職務を語ることを通して紹介している。その3つの職務とは、「預言者、祭司、王」である。

まず、**「証人、誠実な方」**（預言者の職務）として、父なる神の真理を人々に語り伝える。主イエスは言葉で真理を教えただけでなく、ご自身の命をかけて、十字架の死に至るまで神様の愛と正義を証しされた。

次に、**「死者の中から最初に復活された方」**（祭司）として、父なる神と人間の間に立ってとりなした。主イエスはご自身を究極の「いけにえ」としてささげ、死に打ち勝って最初に復活された。この復活は、主イエスのささげた命が神様に完全に受け入れられたことの証拠である。 そして、

三つ目は、**「地上の王たちの支配者」**、つまり**「王」**として、である。主イエスは、十字架と復活を通して、すでに今、この世界の本当の王として治めておられる。地上のどんな権力者も、主イ

エスの支配の下にある。迫害の中で苦しむ人々にとって、この「主イエスがすでに世界を治めている」という事実は、最大の慰めであったはず。

5節後半.**「わたしたちを愛し、ご自分の血によって罪から解放してくださった方」**
この短い言葉に、私たちの救いの核心が語られている。キリスト者（教）の信仰は、私たちが自分の罪のゆえに受けるべきだった罰を、主イエスが十字架の上で代わりに受けてくださったと信じることである。ここで**「解放した」**という言葉（λούσαντι、ルーサンティ、washed, bathed, washing）は、過去の完了した（has freed ）出来事として書かれている。つまり、私たちの救いは、私たちの毎日の行いや努力によって揺れ動く不確かなものではなく、主イエスの流された血によって「すでに完全に達成されている」のである。

6節.**「わたしたちを王とし、御自分の父である神に仕える祭司としてくださった方」**
十字架の救いの結果、私たちは単に罪を赦されただけでなく、御国の**「王」**、そして**「祭司」**という驚くべき身分を与えられた（ペトロの手紙一1章9節参照）。宗教改革の時代、教会の中には「特別な訓練を受けた神父や牧師だけが神様に近づける」という考えがあった。しかし、ルターやカルヴァンはこの聖書の言葉から、「主イエスを信じる者は全員、直接神に祈ることができ、神に仕える祭司である」という「全信徒祭司」（万人祭司）の教えを回復した。これは、教会だけではなく、私たちの日常（週日）のすべての働きが、神にささげる「祭司としての奉仕」になるという教えでもある。

７－８節.ここでは、必ず戻ってこられる主イエスと父なる神の絶対的な主権が語られている。
手紙の挨拶の最後に、ヨハネの視線は、世界の終わり（主イエスの再臨）へと向けられる。
「見よ、その方が雲に乗って来られる」。主イエスは、密かにではなく、**「すべての人の目」**に見える形で、栄光に満ちたお姿で戻ってこられる。その時、神様に従わなかった世界の権力者たちは自分たちの敗北を悟って嘆き悲しみ、苦しみの中で神様に従い続けた教会（キリスト者）は、ついに究極の勝利と慰めを受け取る。
８節で、父なる神ご自身が直接宣言される。「わたしはアルファであり、オメガである」
アルファ（A）とオメガ（Ω）は、ギリシャ語アルファベットの最初の文字と最後の文字です。これは、神がすべての始まりであり、すべての終わりであること、つまり「歴史の最初から最後までを完全に支配しておられる絶対的な主権者である」という力強い宣言である。

最後に、本日の個所を通して教えられるのは、私たちが信じている神様がどのようなお方であり、私たちがどれほど確かな愛によって救われているかである。歴史は人間の思い通りや偶然で動いているのではなく、アルファでありオメガである神様の確かな手の中にある。このことを信じ、また私たちの罪は、主イエスの十字架の血によって完全に赦されていることを確信し、キリスト者皆が**「祭司」**として、日々の生活の中で神様に仕える特権が与えられていることを心に刻みたい。不安や理不尽なことが多い現代社会にあっても、すでにこの世界の王として治めておられる主イエスを信頼し、希望を持ってそれぞれの歩みを続けていくこと。それが、本日の個所が私たちに伝えている力強いメッセージである。